

2022年8月18日、戦国時代の土塁などの遺構と自然が残る臼井田宿内砦跡が史跡として佐倉市指定文化財になりました。

この砦跡は、戦国末期に築かれた臼井城の支城の一つで、主郭部には寺院の基壇と想定される方形区画が確認され、原胤栄が道誉上人を招いて造立したという長源寺が主郭部にあったと推定されています。

現在は宿内公園として良好な状態で散策ができますが、30年前はマンション建設の予定地として存亡の危機的状況にあり、私も、1994年『史談八千代』19号に「臼井田宿内砦跡の現状と歴史的意義」と題する緊急レポートを掲載して、遺跡の保全を訴えてきました。

本日は、現地をご案内するにあたり、2017年から4次にわたる主郭部の発掘調査報告書（2121年3月発刊）、2022年7月の佐倉市文化財審議会会議報告などから、最新の情報をお伝えしたいと思います。

## 第1部 学習会「臼井田宿内砦跡の意義と文化財指定について」

### 1. 臼井城と宿内砦跡の歴史

臼井氏は平安末期から続く千葉一族の中でも古い名族で、臼井庄を支配していたが、宝治合戦などで没落、応元年（1338）臼井興胤が足利尊氏に戦功が認められて、臼井城と臼井庄の本領安堵がなされたという。

文明11年（1479）臼井俊胤の時、太田道灌の率いる上杉方に攻められ、七ヶ月に及ぶ籠城の後に陥落するも千葉孝胤が奪回した。

天文7年（1538）第一次国府台合戦で小弓公方足利義明が討ち死し、味方していた臼井氏も滅ぶ。

弘治3年（1557）小弓城主の原胤貞が臼井久胤の後見として臼井城に入り、永禄4年（1561）正木氏の下総侵攻と永禄7年の第二次国府台合戦で原氏による臼井城奪回、以後、原氏の城となる。

永禄9年上杉謙信の「実城堀一重」までの攻撃に反撃し、退却させる。

元龜元年（1570）原胤栄の招きで道誉上人が長源寺を開山。場所は宿内砦跡上と推定される。

このころ、里見軍が下総侵入を伺う極度の緊張状態にあり、北条氏との同盟・従属関係が続く。

天正18年（1590）小田原征伐により豊臣側に接收され、酒井家次が入城。慶長9年（1604）廃城。

安永元年（1772）長源寺が焼失、現在の山裾の地に移ったといわれる。

### 2. 臼井城総構と臼井田宿内砦跡の構造と歴史的意義

12世紀に臼井氏が拠点とした臼井は、特に戦国期には印旛沼から香取の海を経て関宿・古河への水運と、下総台地を東西に貫く「下総道」（森山-多古--本佐倉-臼井-大和田-船橋-市川-浅草のルート）、小弓-臼井-印西を結ぶ南北の道の結節点で、政治的・経済的な重要地点であった。

戦国時代に原氏によって整備されたと推定される臼井城の総構は、安政年間刊の『利根川図誌巻四』の「臼井古城圖」（資料2）によれば、「本丸」（臼井城Ⅰ）「字城ノ内」（Ⅱ郭）と4つの「トリデアト」（洲崎・仲台・田久里・稻荷台砦）を配置する壮大な城郭であったと推定されるが、現在その4つの砦跡は宅地造成によって消滅している。

今回佐倉市の文化財に指定された臼井田宿内砦跡は、印旛沼に突き出した総構の南東端の舌状台地上に位置し、土塁や堀、腰曲輪など城砦遺構として現在も良好な状態を維持しているが、「臼井古城圖」で

は、宿内砦の台地上には、Ⅲ郭付近に「長源寺」、Ⅱ郭付近に「観音堂」の記載のみとなっていて、城砦遺構として確認されたのは、1983年に組織された「臼井城跡研究会」の調査以降である。

この遺構が近世に砦跡と認識されなかった由縁は、ここに城主原胤栄が小弓の大巖寺の高僧道誉上人を招いて「新大巖寺」（後の長源寺）を建立し、廃城後も寺院としてあったが、安永元年（1772）焼失、天明元年（1781）に現在の山裾の谷あい、または、Ⅲ郭に場所を移して再建されたことにより、「おおもりのやま」（原氏の家老大森家の所有の山）とよばれる自然の山に帰り、いつしか砦跡としての記憶も消失からであろう。

### 3. 臼井田宿内砦跡の発掘調査でわかったこと

2017～2020年に佐倉市により臼井田宿内砦跡1郭の発掘調査が4次にわたって行われ、弥生と古墳時代の住居跡のほか、中世城郭に関連する台地整形区画、溝状以降などが確認されている。

I郭の方形区画は地山を削って整形されており、この改変は堂宇建設の地業として行われたとされる。中世の出土遺物は少ないが、15世紀後半代の緑釉小皿などの瀬戸・美濃産の陶磁皿、銭貨などが検出されている。

以上から、15世紀後半にはこの台地が利用され、16世紀後半臼井城の支城として機能、その後1566年の上杉軍の来攻などの緊張状態への対応として土塁や堀を構築したと、報告書では推定している。

また、文化財指定理由書では、生活用品の検出が微小であることから「非常時にこもる砦であったことがうかがわれた」と述べている。

私は、『史談八千代』19号でも述べたが、当時円応寺は臼井城址Ⅲ郭の寺台にあり、沼に面した臼井城の主郭部は、右手の岬上に長源寺、左手に円応寺という両翼の「城砦寺院」に抱かれるように東岸の守りを固めていた。現在の円応寺のある「江間」は城の舟付場で、千葉氏宗家の本拠地・本佐倉城の北東側方面の水運による補給路の見守りとして、両翼の城砦寺院の果たす役割は重要であったと思う。

「古城圖」に「長源寺」があったとされる臼井田宿内砦跡Ⅲ郭の発掘調査が行われれば、この砦跡の状況と果たした役割がより明確になるであろう。今後に期待したい。

## 第2部 見学会「宿内公園内の砦跡遺構と長源寺を訪ねて」

コース：①臼井公民館＝御伊勢山公園（「古城圖」の「太神宮」の神明社）＝②京成線歩行者用踏切＝③堀底道のような山道＝宿内公園入口＝④宿内砦跡Ⅲ郭＝土塁＝⑤I郭（方形の整形区画、「たんぼの丘」）＝⑥腰曲輪の墓地 道誉上人墓塔（五輪塔）＝⑦長源寺（砦跡にあった下総型板碑など）＝⑧佐倉道の旧臼井宿の通り＝⑨旧臼井駅脇の踏切＝⑩三差路の成田道道標など石塔群＝⑪旧道＝臼井公民館

⑩の石塔：左から文化3年江戸商人建立の道標「西江戸道・東成田道・南飯重生ヶ谷道」・地藏像道標「さくら道」年不詳・廻国塔 天明6年・供養塔断碑

### 参考文献

巖由美「緊急レポート 臼井田宿内砦跡の現状と歴史的意義」『史談八千代』19号 1994年11月

「令和4年度 第一回佐倉市文化財審議会 臼井田宿内砦跡 指定理由書（案）」2022年7月

『臼井田宿内砦跡（主郭部第1・2・3・4次）発掘報告書』佐倉市教育委員会 2021年3月

『下総臼井城』臼井城跡研究会 2012年1月

『現代語訳「千葉臼井家譜」臼井氏秀胤 編輯』臼井八景・八ヶ寺めぐり実行委員会 2020年9月

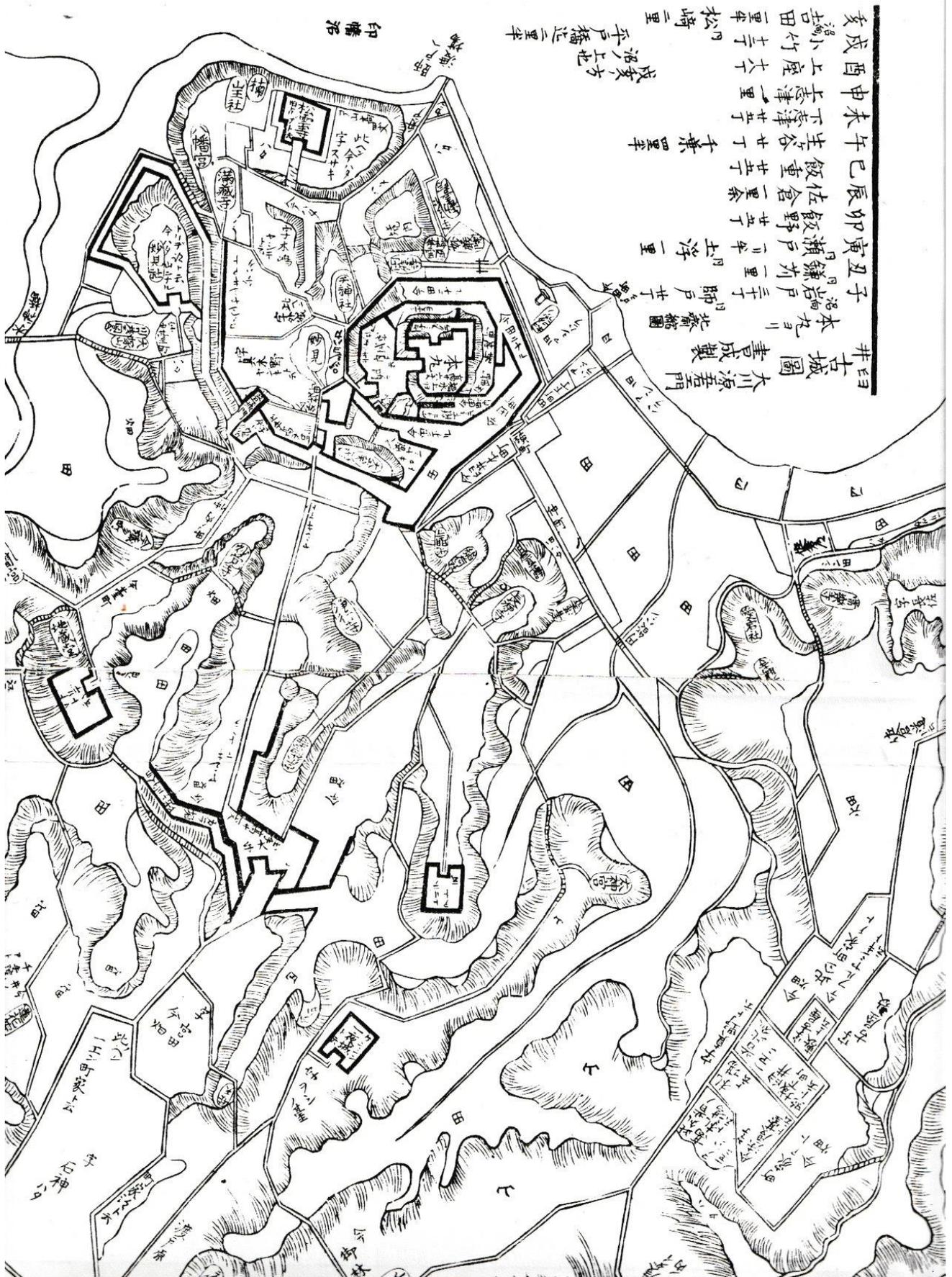
遠山成一「中世佐倉の水陸交通－臼井地域を中心として－」臼井公民館歴史講座資料 2022年11月

「臼井古城圖」『利根川図誌』巻4 赤松宗旦原著 安政年間刊 論書房より現代語版を刊行



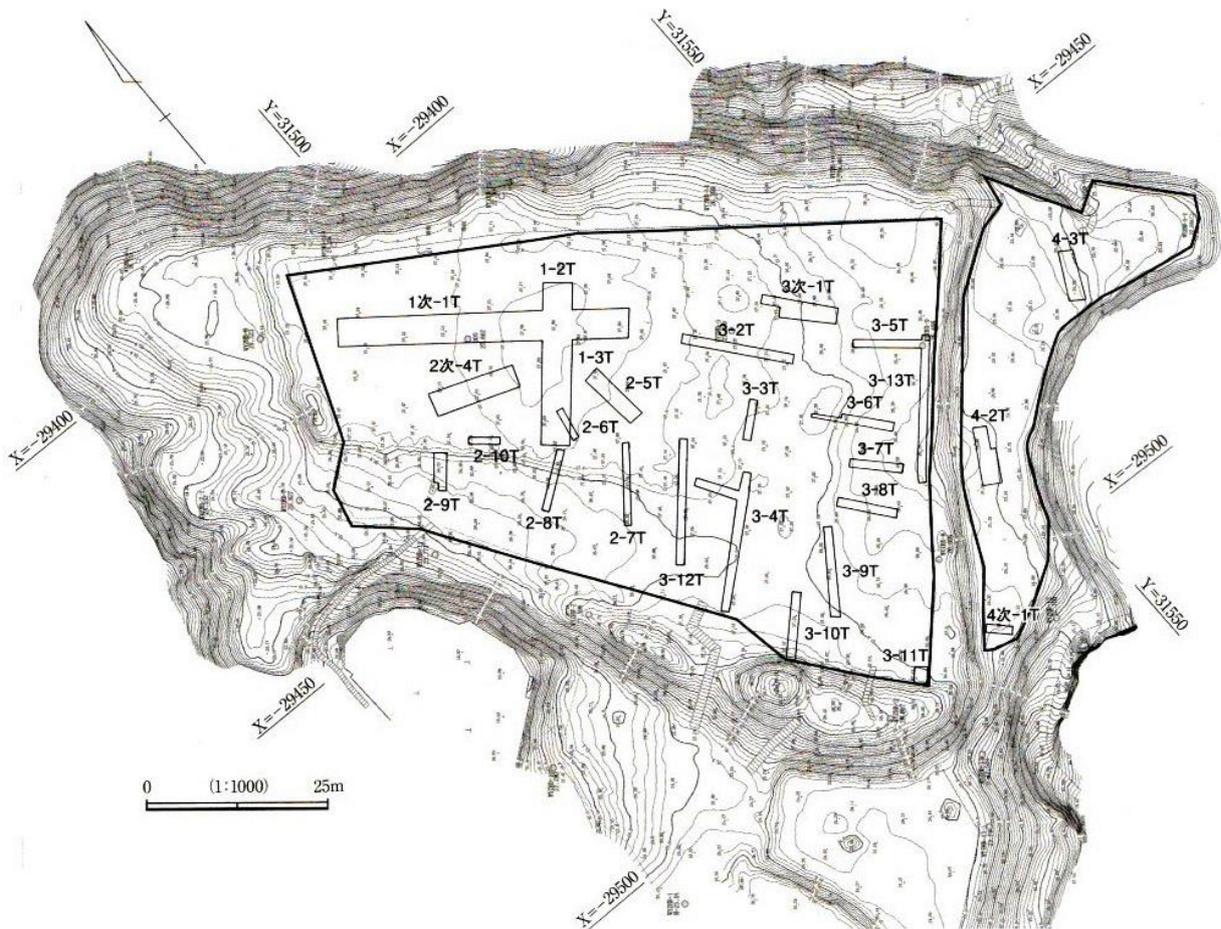
- ①復元に用いた資料：昭和22年撮影米極東米軍空中写真、「下総国葛飾郡臼井郷図」、「佐倉市誌資料第二輯」、「臼井舊事録」、「下総国印旛郡臼井村臼井台臼井町全図切絵図」ほか。
- ②字名については市街地化移行前の旧字名とした。
- ③既に消滅した字名ないし通称については( )付とした。

臼井城復元図 (元図 昭和29年 1/20,000地形図 50%縮小)





資料4 出典：『白井田宿内砦跡(主郭部第1・2・3・4次)発掘報告書』



— 7 —

第1次～4次調査区トレンチ設定図

資料5 出典：『白井田宿内砦跡(主郭部第1・2・3・4次)発掘報告書』

## 報告書抄録

所収遺跡名	主な遺構	主な遺物	特記事項
白井田宿内砦跡(主郭部第1次)	弥生時代竪穴住居跡3軒、古墳時代竪穴住居跡1軒・土坑1基、中世焼土跡1基、近世台地整形区1カ所・土坑2基・溝2条	縄文土器、弥生土器、古墳時代土師器・土製品、近世陶磁器、石製品、青銅製品、鉄製品、銭貨	溝を伴う台地整形と地山の削り残しを確認した。
白井田宿内砦跡(主郭部第2次)	弥生時代竪穴住居跡3軒、古墳時代住居跡2軒、中世土坑1基・溝状遺構1条、近世土坑4基・溝状遺構4条、台地整形区画2カ所、道路状遺構1条	縄文土器、弥生土器、古墳時代土師器、中近世陶磁器、銭貨	中央の地山削り残しは方形基調の基壇となる可能性が高い。段差d付近のトレンチでは中世土坑とそれより新しい時期の硬化面が検出された。台地上面の北西から南東に延びる溝では、覆土中に宝永の火山灰が含まれていた。
白井田宿内砦跡(主郭部第3次)	弥生時代竪穴住居跡1軒、古墳時代竪穴住居跡5軒、中世溝状遺構2条・土塁2条・台地整形区画2カ所・土坑9基、近世竪穴状遺構1基・土坑8基、溝状遺構2条・道路状遺構1条	縄文土器、弥生土器、古墳時代土師器、中世陶器、近世磁器・銭貨	中世城郭に関連する台地整形区、溝状遺構などが確認され、整形区画の造営時期がおおよそ判明した。
白井田宿内砦跡(主郭部第4次)	中世溝状遺構2条	縄文土器、弥生土器、古墳時代土師器、近世陶器	調査区中央で主郭に至る道路跡と思われる2条の溝が検出された。

資料6 見学会コース地図



資料7 白井田宿内砦跡の写真



南側からⅢ郭への道



宿内公園入口



宿内砦跡Ⅲ郭からの土塁



Ⅰ郭（方形の整形区画）



Ⅰ郭からの印旛沼



道誉上人墓塔（五輪塔）



長源寺



長源寺の下総型板碑





第2図 白井城跡主要部地形測量図

